**降誕節第１主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年12月29日**

**「御翼のもとに」**

**ルツ記2章1～23節**

 **2:1 ナオミの夫エリメレクの一族には一人の有力な親戚がいて、その名をボアズといった。**

 **2:2 モアブの女ルツがナオミに、「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで、落ち穂を拾わせてもらいます」と言うと、ナオミは、「わたしの娘よ、行っておいで」と言った。**

 **2:3 ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレクの一族のボアズが所有する畑地であった。**

 **2:4 ボアズがベツレヘムからやって来て、農夫たちに、「主があなたたちと共におられますように」と言うと、彼らも、「主があなたを祝福してくださいますように」と言った。**

 **2:5 ボアズが農夫を監督している召し使いの一人に、そこの若い女は誰の娘かと聞いた。**

 **2:6 召し使いは答えた。「あの人は、モアブの野からナオミと一緒に戻ったモアブの娘です。**

 **2:7 『刈り入れをする人たちの後について麦束の間で落ち穂を拾い集めさせてください』と願い出て、朝から今までずっと立ち通しで働いておりましたが、今、小屋で一息入れているところです。」**

 **2:8 ボアズはルツに言った。「わたしの娘よ、よく聞きなさい。よその畑に落ち穂を拾いに行くことはない。ここから離れることなく、わたしのところの女たちと一緒にここにいなさい。**

 **2:9 刈り入れをする畑を確かめておいて、女たちについて行きなさい。若い者には邪魔をしないように命じておこう。喉が渇いたら、水がめの所へ行って、若い者がくんでおいた水を飲みなさい。」**

 **2:10 ルツは、顔を地につけ、ひれ伏して言った。「よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは。厚意を示してくださるのは、なぜですか。」**

 **2:11 ボアズは答えた。「主人が亡くなった後も、しゅうとめに尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。**

 **2:12 どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」**

 **2:13 ルツは言った。「わたしの主よ。どうぞこれからも厚意を示してくださいますように。あなたのはしための一人にも及ばぬこのわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました。」**

 **2:14 食事のとき、ボアズはルツに声をかけた。「こちらに来て、パンを少し食べなさい、一切れずつ酢に浸して。」ルツが刈り入れをする農夫たちのそばに腰を下ろすと、ボアズは炒り麦をつかんで与えた。ルツは食べ、飽き足りて残すほどであった。**

 **2:15 ルツが腰を上げ、再び落ち穂を拾い始めようとすると、ボアズは若者に命じた。「麦束の間でもあの娘には拾わせるがよい。止めてはならぬ。**

 **2:16 それだけでなく、刈り取った束から穂を抜いて落としておくのだ。あの娘がそれを拾うのをとがめてはならぬ。」**

 **2:17 ルツはこうして日が暮れるまで畑で落ち穂を拾い集めた。集めた穂を打って取れた大麦は一エファほどにもなった。**

 **2:18 それを背負って町に帰ると、しゅうとめは嫁が拾い集めてきたものに目をみはった。ルツは飽き足りて残した食べ物も差し出した。**

 **2:19 しゅうとめがルツに、「今日は一体どこで落ち穂を拾い集めたのですか。どこで働いてきたのですか。あなたに目をかけてくださった方に祝福がありますように」と言うと、ルツは、誰のところで働いたかをしゅうとめに報告して言った。「今日働かせてくださった方は名をボアズと言っておられました。」**

 **2:20 ナオミは嫁に言った。「どうか、生きている人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人を祝福してくださるように。」ナオミは更に続けた。「その人はわたしたちと縁続きの人です。わたしたちの家を絶やさないようにする責任のある人の一人です。」**

 **2:21 モアブの女ルツは言った。「その方はわたしに、『うちの刈り入れが全部済むまで、うちの若者から決して離れないでいなさい』と言ってくださいました。」**

 **2:22 ナオミは嫁ルツに答えた。「わたしの娘よ、すばらしいことです。あそこで働く女たちと一緒に畑に行けるとは。よその畑で、だれかからひどい目に遭わされることもないし。」**

 **2:23 ルツはこうして、大麦と小麦の刈り入れが終わるまで、ボアズのところで働く女たちから離れることなく落ち穂を拾った。ルツはしゅうとめと一緒に暮らしていたが、**

**マタイによる福音書11章28～30節**

 **11:28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**

 **11:29 わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。**

 **11:30 わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」**

1.

**先週はイエス様の御降誕をお祝いするクリスマス礼拝と聖夜礼拝が行われました。初めて教会に来られた方、久しぶりに来られた方が与えられ、共に礼拝を守る喜びが与えられました。礼拝後の祝会では歌や楽器の演奏に腹話術まで登場し大変恵まれた祝会を持つことができました。そして、聖夜礼拝ではキャンドルの灯りの中で礼拝を守ることができました。**

**イエス様はユダヤのベツレヘムの家畜小屋で小さな赤ちゃんの姿でお生まれになられました。そのイエス様のもとに東方から占星術の学者たちが礼拝をしに来て、黄金、乳香、没薬という自分たちにとって非常に大切なものを贈り物としてささげました。また、天使からイエス様誕生の知らせを聞いた羊飼いたちはイエス様を礼拝をしに行きました。そのようなイエス様誕生の出来事があったユダヤのベツレヘムが本日私たちが与えられています旧約聖書ルツ記の舞台です。イエス様の誕生よりも1000年程前の物語であります。**

1.

**異国の地異教の地であるモアブの地で愛する夫と二人の息子を亡くしたナオミはベツレヘムに帰国します。でも、その帰国はナオミ一人ではありません。息子の妻であるルツがナオミを慕ってついて来てくれたのです。「あなたの民はわたしの民　あなたの神はわたしの神」（1：16）とルツは信仰の告白をしてモアブの地を捨て異教の神を捨てて、主なる神様をナオミと共に信仰するように導かれたのです。そうしてナオミとルツは1：22にありますように「大麦の刈り入れの始まるころ」にベツレヘムに帰国したのです。二人の帰国がその時であったところに見えざる神様の導きがあるのです。**

**ルツとナオミ、若い未亡人と年老いた女性、二人の女性がベツレヘムで生きていかなければなりません。今の時代でも女性だけで生きていくのは苦労が伴いますが、この時代は男性の保護がないと生きていくのは不可能に近いことでした。そしてそのような貧しく弱い立場の女性などのために落穂拾いは律法に定められた、いわば一つのセーフティーネットでした。レビ記19：9～10にこのように記されています。「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。**

**ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。」**

**貧しい者や寄留者が弱い立場の者がせめて落ち穂を拾って食べるものを得て命を繋いでいけるようにと神様の愛がこのような規定を設けていました。異邦人であるルツがこの規定を知っていたのかはわかりませんが、ルツはとある畑で落穂拾いを始めました。**

**3節には「ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレクの一族のボアズが所有する畑地であった。」**

**「たまたま」と訳されている言葉は「偶然」を意味する言葉です。ルツはそこが有力な親戚のボアズの畑であるとわかっていてそこで落穂ひろいをしたら多く大麦を拾えるだろうと計算してボアズの畑に行ったのではなく、何も知らずに畑に行ったら本当にたまたまに偶然にそこがボアズの畑であったのです。そして、ここにも神様の見えざる導きがあるのです。もし、ルツが他の人の畑で落穂ひろいをしていたら、この後の物語はなかったのです。ボアズと出会うことなく、ルツもナオミもその一生を終えていたでしょう。しかし神様はルツからしたら偶然ですが、神様の必然の中でルツをボアズと出会わせてくださったのです。**

**4節は日本語の聖書では訳されていませんが、冒頭に「そして見よ！」という言葉があります。「そして見よ！ボアズがベツレヘムからやって来たではないか」と神様が二人を出会わせてくださったことを強調しています。小屋で一休みしているルツを見かけたボアズは召し使いから彼女のことを聞きました。そしてルツに対して厚意を示します。ボアズはルツが食べ残すほど食事を与えます。さらには、若者に刈り取った束からわざと穂を抜いて落としておくように命じます。これは先ほどの律法の規定以上の厚意をボアズはしたのです。そのおかげでルツは1日落穂ひろいをして大麦1エファも背負って家に帰りました。1エフェとは約23ℓ、大人２人だと５～7日間は食べるのに困らない量と言われています。さらにルツはボアズの厚意で食べきれなかった食事もナオミに差し出しました。あまりの量の多さにナオミは非常に驚きいったいどこで落穂ひろいをしてきたのかと問います。ルツはボアズのもとで落穂ひろいをしたことを伝えるとナオミは言います。**

**「どうか、生きている人にも死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人を祝福してくださるように。」ナオミは更に続けた。「その人はわたしたちと縁続きの人です。わたしたちの家を絶やさないようにする責任のある人の一人です。」（20節）**

**ナオミははっきりとこれは神様の慈しみであることが分かったのです。ベツレヘムに帰って来た時は「主がわたしを悩ませ、全能者がわたしを不幸に落とされた」と嘆いていたナオミが、これは神様の導きであり慈しみであることがわかったのです。それはボアズが家を絶やさないようにする責任のある人の一人であるからです。これもまた律法の規定で定められたものでした。ルツは大麦と小麦の刈り入れが終わるまで毎日ボアズの畑で落穂ひろいをすることで食糧を得て、決して飢えて死ぬことなく神様によって守られたのでした。**

**なぜボアズが初めて出会った女性であるルツにここまで親切にするのでしょうか。しかもルツはモアブの女性であり異邦人女性です。ボアズはユダヤ人です。その立場を考えたらここまで親切にするのは不自然とも思えるほどです。ただ単にルツが美しい女性であったから好意を持っていたとも考えられますが、果たしてそんなに単純なものでしょうか。**

**11節12節でボアズはルツにこのように言っています。「主人が亡くなった後も、しゅうとめに尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。**

 **どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように。」**

**ボアズは「何もかも伝え聞いていた」のです。ルツのこれまでの境遇、何もかも捨てて見ず知らずの地であるベツレヘムに来たこと。姑であるナオミに一生懸命尽くして生きていること。ボアズはそのルツの歩みが単にナオミに対する愛情やましてや使命感でナオミに仕えているのではなく、主なる神様に信頼して主なる神様への信仰から出たものであると受け止めたのです。ルツの神様への信仰がルツを動かしている、そこに信仰者の姿を見たのです。だからこそ、主がその行為に報いてくださるようにと祈るのです。ルツがその御翼のもとに身を避けようとしてやって来た主なる神様から豊かな報いがあるように、と祈ったのです。そしてボアズもまた信仰者としてルツに愛の業を示したのです。**

**「御翼のもとに」ボアズがルツに語りかけた祈りの言葉がなんと素晴らしい言葉であるかと思います。**

**「御翼のもとに」親鳥は卵からかえった小さなひな鳥である我が子をその翼を広げて必死に守ります。雨が降れば翼を広げて我が子が濡れて冷えないように守ります。天敵が来たら親鳥はその翼を広げて威嚇して敵の攻撃から我が子を守ります。時には自分が犠牲になっても親鳥は愛する我が子を守るのです。その親鳥の愛があるからこそひな鳥は安心して親鳥に信頼して生きていき成長していくことができるのです。ボアズはルツこそが主にどこまでも信頼して身元に身を寄せるひな鳥であり、また自分も主なる神様に信頼してその御翼のもとに身を寄せるひな鳥であるにすぎないことを語るのです。そして翼を広げて守って下さるお方こそが父なる神様であることを現すのです。**

**詩編91：4にはこのように記されています。**

**「神は羽をもってあなたを覆い／翼の下にかばってくださる。神のまことは大盾、小盾。」**

**主なる神様はその翼を広げて守って下さる親鳥であり、神様の翼は大盾、小盾として私た**

**ちを守って下さるその信頼を表した歌です。親鳥が翼を広げて必死になって愛する我が子**

**であるひな鳥を守って下さるように、その身元に身を寄せる私たちを翼を広げて必死にな**

**って守って下さるのです。その神様の御翼のもとにこそ私たちの平安があるのです。**

**イエス様は私たちに言われます。**

**「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。**

 **わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。**

 **わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（マタイ11：28～30）**

**イエス様はその御翼の御もとに身を寄せる私たちを休ませてくださり安らぎを与えてくださるのです。その翼を広げ私たちの盾となって守って下さるのです。自らが犠牲となって、ご自身の十字架の死によって私たちのために命を捨ててくださり、そこまでして私たちを罪から救い出して下さり永遠の命の希望を与えてくださったのです。**

**私たちの歩みもひな鳥のようなものです。弱く小さくどこに行けばいいのかわからずにフラフラとしてしまうものです。時に親鳥の元を勝手に離れて迷子になってしまいます。傷つき、迷い、悩み、苦しみます。そんな私たちをイエス様は「私のもとに来なさい」と常に招いて下さっているのです。イエス様の御翼のもとにこそ、私たちの平安があり、私たちの慰めがあり、私たちの希望があるのです。新しい年もインマヌエルのイエス様と共に信仰の歩みを進めていきましょう。**